

草津市立矢倉小学校通信 令和2年2月28日 NO.19



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

何をしたか、何ができるようになったかもさることながら…

自宅の前、向かいの家から青年がさっそうと現れ、玄関先にとめてあった車に乗り込んで姿を消した。「お久しぶり。」の声をかけそびれるほど、見事に大きく背丈が伸び、たのもしくなっていた。彼のご家族からは、大阪の方の芸術大学に通いだしたと聞いていたものだから、あの子がずいぶん大きくなったものだと感心しながら、車が小さくなるのを見送っていた。

そんな彼には印象に残っていることがある。

彼が小学生の頃のこと。よく晴れた日曜の朝である。たどたどしい鍵盤ハーモニカの音が聞こえていた。彼がいるであろう二階の窓が開いていたからだろうか、その澄んだ音色は、私の家の居間までよく聞こえてきた。ミ・ド・ミ・ド・ミ・ソ・ソ…「こいぬのマーチ」だ。たどたどしいながら、なんとか最後のフレーズまでたどり着き、静かになったかと思うと、またミ・ド・ミ・ド…と始まるのだった。そんなほほえましい中に、ちょっぴりハラハラもする演奏を聴きながら、私たち夫婦は、「きっとあした音楽のテストがあるんだろうね。」「すこしずつ上手になってきているなあ。」などと言いつつ合っていた。

しばらくして、母親の「お昼だよ。降りてきなさい。」の声が出た。その声を無視するかのようには彼は最後まで演奏し、再び降りてくるように催促する母親の呼び声にこんなふうに応答した。

「ちょっと待って…もう一回やらせて。だって、楽しいねんもん。」

休みの日などに、子どもがくりかえし何かをしているとき、しかも、そのしていることが学校でやっていることだとすると、ついついテストがあるからだろうか、何かで発表しないといけないからだろうかなどと決めつけてとらえていることがある。そんな自分のとらえ方に恥ずかしさを覚えた彼の言葉だった。あの子の表現することそのものに楽しさがあり、その世界にもっと浸っていたいという感性は、きっと芸術大学に通いだした今の彼につながっているのだろう。

生産性ばかりがものを言う今の世の中の風潮は、ことあるごとに何をしたか、何ができるようになったかが問われる。そうすると、互いが互いをけん制しあっているように思えてならない。何かにつけて、できないことやしていないことはよくないと、不安を掻き立て、あおってばかりの状況だ。役に立ったかどうか、効率的かどうかなどといった軸だけでとらえるのではなく、ものごとの奥行きや広がり、おもしろみが味わえているかどうか、支えあい、共に歩むことに、喜びが見いだせているかなどという、もう一つの軸を持ち合わせていたい。

校長 大林 道範